

## 瀬田遺跡出土編みかごの調査成果

### 概 要

瀬田遺跡から出土した、弥生時代の編みかごについて総合的な調査・研究を進めている。編みかごのひとつに、「四方転びの箱」が脚として付くことが判明した。こうした脚付き編みかごの出土は全国初の事例であり、「四方転びの箱」の用途がはじめて明らかとなった。また、かごの編み方、かご素材の植物種類や調整手法を総合的に把握でき、弥生時代の工芸技術の復元に貴重な一例を加えた。

瀬田遺跡出土編みかごの調査成果について、以下の通り、ポスター展示を実施いたします。  
なお、調査成果の詳細は、『奈文研紀要 2017』において報告いたします。

- 期 間 : 2017年6月23日(金)から2017年12月27日(水)まで
- 会 場 : 奈良文化財研究所 藤原宮跡資料室 \*観覧無料  
(奈良県橿原市木之本町 94-1)
- 開館時間 : 9:00から16:30まで \*会期中無休

《本件に関するお問い合わせ先》

奈良文化財研究所都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区)

担当: 和田 一之輔・浦 蓉子

TEL: 0744-24-1122(代)

## 1. 調査の経緯

瀬田遺跡は、奈良県橿原市城殿町に所在する、縄文時代から平安時代の複合遺跡である。ポリテクセンター奈良（独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構奈良支部 奈良職業能力開発促進センター）の本館建て替えにともない、2015年11月から2016年10月まで、奈良文化財研究所が発掘調査を実施した（飛鳥藤原第187次調査）。その結果、弥生時代後期末の陸橋をもつ円形周溝墓が発見されるなど、前方後円墳の成立過程を考える上で重要な成果が得られ、大きな注目を集めた。

この調査では、弥生時代後期末から終末期の編みかごが4点出土した。現在、調査・研究を進めているところであるが、一定の成果がまとまったので報告する。

## 2. 編みかごの内容

編みかごは、陸橋付き円形周溝墓の周溝底から1点、2基の土坑から3点、合計4点の編みかごが出土した。いずれも弥生時代後期末から終末期初頭のものである。

このうち、周溝墓から出土した編みかごが、もっとも遺存状態の良いものである。その底部には、「四方転びの箱」が脚として付いている。「四方転びの箱」は、四面の側板が傾斜して立ち上がる箱状品である。これまでに弥生時代から古墳時代にかけて約50例が出土しているが、その用途は不明であった。本例では、編みかごの底部にこれが結えられた状態のままであったため、編みかごの脚としての用途がはじめて明らかとなった。なお、こうした脚付き編みかごの出土は、本例が全国初の事例となる。

植物解剖学的分析をおこなったところ、かご素材の植物の種類や、その調整手法が判明した。おもに利用された植物は、タテ材とヨコ材がタケ亜科（稗）、親骨はヒサカキ（枝）、親骨の巻き付け材と脚の留め紐はツヅラフジ（蔓）である。これらは、植物の特性を熟知し、利用する植物を適切に選択していたことを示す。また、かごの部位によって、素材の太さや厚さを調整し、編み方を変えるなど、編みかごの製作にあたって工夫がみられる。縄文時代から受け継がれた、工芸技術の水準の高さが知られる。

このように、編みかごを考古学と植物学の双方から総合的に調査した事例は、近畿地方では数少なく、弥生時代の工芸技術と植物利用の解明に大きく寄与するものと期待される。なお、植物解剖学的分析については、共同調査として、鈴木三男氏（東北大学植物園）、小林和貴氏（東北大学植物園）、能城修一氏（森林総合研究所）が調査をおこなった。

### 3. 研究の成果と意義

調査・研究の成果は、下記の3点に要約される。

- ① 明確な脚をもつ弥生時代の編みかごとして、全国初の例である。
- ② これまで用途不明であった「四方転びの箱」について、編みかごの脚であることがはじめて明らかとなった。
- ③ 類例の少ない近畿地方における弥生時代の編みかごのなかでは、編み方、素材となる植物の種類や調整手法が総合的に明らかとなった貴重な事例である。

#### 【参 考】

##### ●編みかご

編みかごは縄文時代には認められ、かご・ざる・びく状など様々な形態・大きさがある。縄文時代早期初頭（約12,000年前）の滋賀県栗津湖底遺跡から出土した破片が古い事例。完形の編みかごでは、縄文時代早期後葉（約8,000年前）の佐賀県東名遺跡例が初期の例となる。編みかごは、食料や材料などの採集・運搬・貯蔵に用いられたほか、民具の例では米研ぎや水切りなどにも使用されている。

##### ●「四方転びの箱」

四面の側板が傾斜して立ち上がる、角錐台状をなす木製品。弥生時代から古墳時代にかけて、類例が認められる。

##### ●植物の種類

- ・タケ亜科（稗）……タケ・ササ類の中空の茎。東京都下宅部遺跡（縄文時代後期：約3500年前）の編みかごでは、ネザサ節（アズマネザサ）を利用していると推測されている。
- ・ヒサカキ（枝）……サカキ科の常緑樹（広葉樹）。本編みかごでは、切り株や切り口から萌芽した枝（徒長枝）を使用する。
- ・ツヅラフジ（蔓）……ツル性植物。本編みかごでは、樹木等に巻き付く蔓（空中茎）ではなく、より柔軟である地表を這う蔓（地表横走茎）を使用したと考えられる。本編みかごでは、親骨の巻き付け材や脚の留め紐に利用する。
- ・ツブラジイ……ブナ科の常緑樹（広葉樹）。本編みかごでは、脚の側板に使用される。



写真1 調査区全景と編みかごの出土地点（東から）

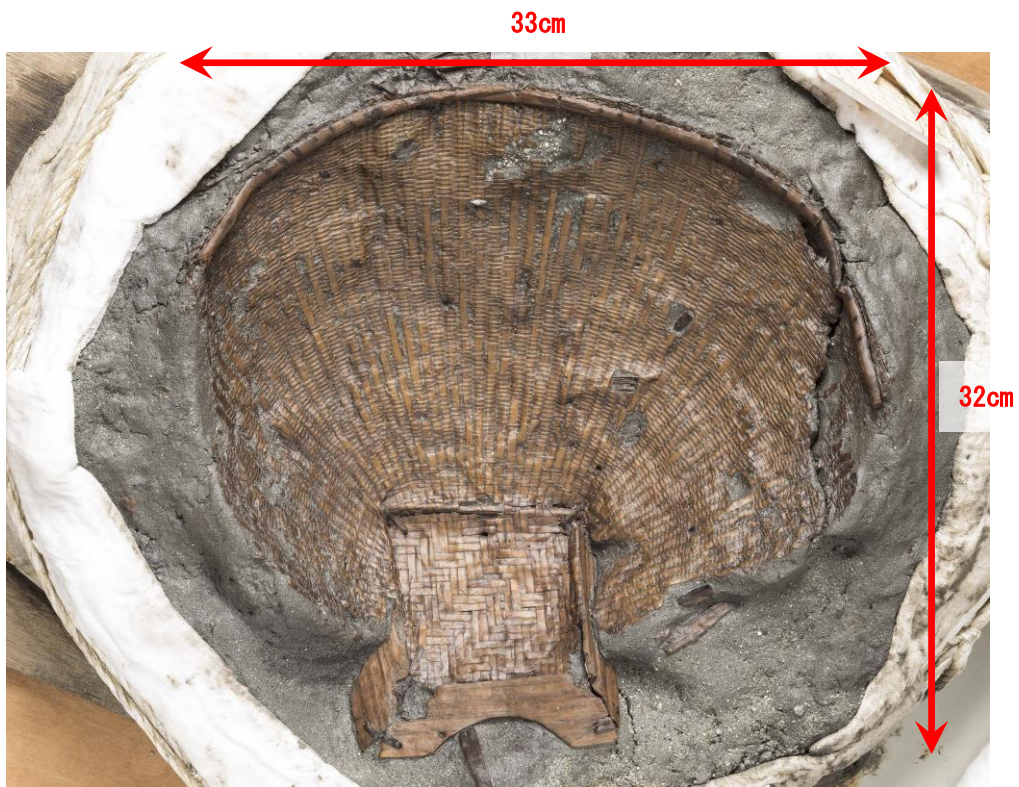


写真2 脚付き編みかご

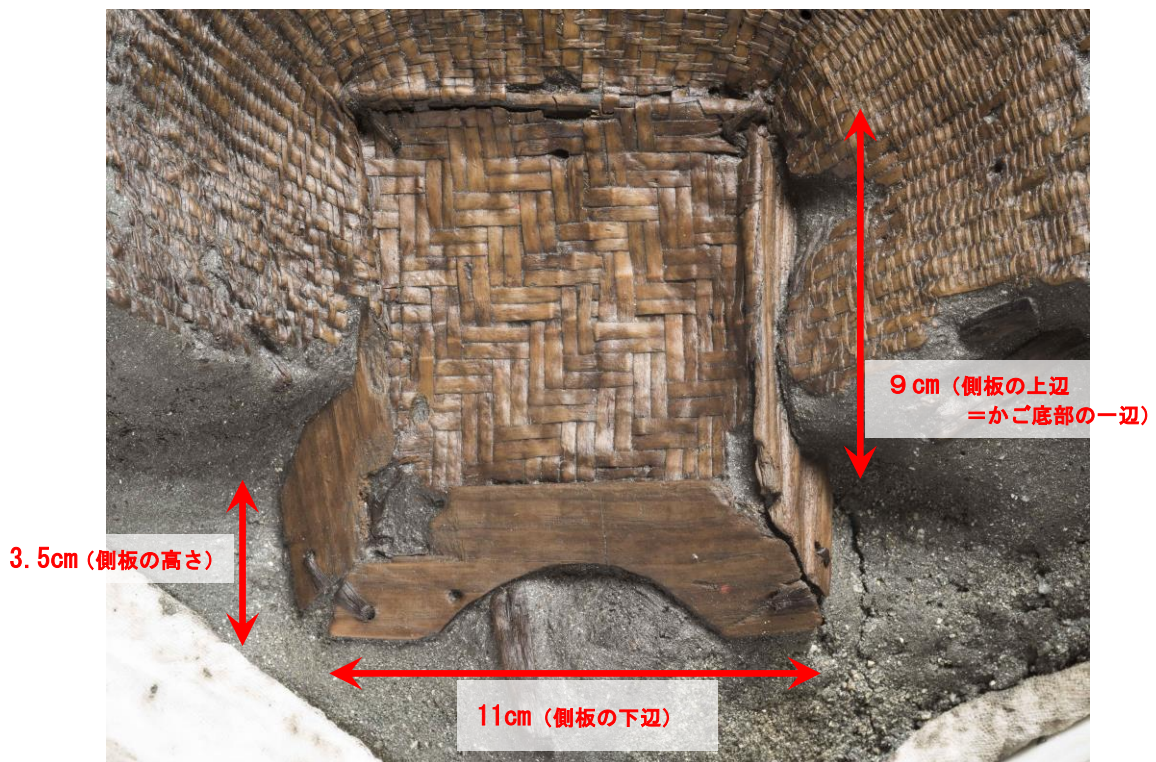


写真3 脚部 - 「四方転びの箱」